視点

# 「日の丸」

中村　哲
（医師・ペシャワール在住）

昨年の湾岸戦争の勃発直後の二月、私はアフガニスタン国内診療所開設の下調査で、最も保守的なイスラム部族社会のただ中にいた。日本が九十億ドルという巨額を支出して参戦した事が、現地では大々的に報道され、親日感情は一転、「米英の卑屈な走狗・日本」との印象がゆきわたり、身の縮まる思いをしたことがある。

我々ＪＡＭＳ（日本―アフガン医療サービス）は、現地で各車両に日章旗を描いている。「ジープに日の丸」と言えば日本人は右翼団体を想像するが、そうではない。我々には死活問題で、親日感情を利用し、反米感情の強い現地住民のテロ行為のとばっちりを避けるためだった。しかしあの当時、私は車両に描いていた日章旗が恨めしく、塗りつぶすことさえ真剣に考えたものである。

だが事実は、診療所開設予定地のイスラム住民は、殉職者さえ出したＪＡＭＳの献身的な活動に信頼を抱いていた。気づいたのは、日本人の思惑とは全く無関係に、きな臭いライフル銃の林立する現地で、日章旗が、平和と希望の美しい象徴たり得たことである。

その後日本で行われたＰＫＯの論議も、日の丸論議も、我々には調子外れな気がした。確かに、日章旗は日本の過去、日本人の誇りと後ろめたさを引きずっている。しかし、日本国民がいたずらに自分だけ納得する懺悔や国際貢献論をくりかえさず、真心を以て現地の立場に立つ限り、語らずして日本は平和の使者たりうるはずである。

毎日新聞 92(H4).1.22